



International Symposium on Environmental Endocrine Disrupters 2000

Saturday, December 16 - Monday, December 18, 2000

特別講演

2000年12月16日(土)

Special Lecture

Saturday, December 16, 2000

内分泌攪乱の試験法： 「体内小宇宙：インナースペース」より良く理解するために

ティオ コルボーン
WWF（世界自然保護基金）

現在、化学物質の内分泌攪乱作用に関する試験には政府の承認を受けた標準化されたプロトコールはない。しかし、科学文献には、実験動物、野生生物、およびヒトにおける天然化合物や人工化合物の内分泌攪乱作用について数多く報告されている。様々な科学分野の研究者が、膨大な数の技術を用いて、内分泌攪乱作用の証拠を示している。悪影響を検証する方法として文献に報告されているプロトコールは、研究対象とした動物、追跡した化合物、検査した臓器や組織、測定したエンドポイントと同様に数多く存在する。常識的に考えれば、こんなに膨大な文献があれば、1つか2つの基礎的または基本的試験モデルが採用され、妥当性を検証して標準化されていて当然だろう。

自然の条件または混乱した条件下で、受胎から出生までにどのようなことが起きるかは、この10年間に多くの知識が蓄積されており、内分泌攪乱に関する研究は、広範囲にわたる伝統的な分野にまたがる新しい学問分野となっている。この「体内小宇宙：インナースペース」の研究の結果、新しい学部が設立され、世界中の大学の生物学、動物学、公衆衛生、獣医学、政策、法律、哲学、および宗教の分野で数多くのプログラムやコースが現れている。同様に、行政機関は、内分泌攪乱に関する専門の部門や予算を設けている。今日出席しておられる科学者の皆さんが提示したデータがなければ、内分泌攪乱の概念に対する学界や政府によるこのような反応はなかったであろう。科学者の方々の「体内小宇宙：インナースペース」の研究により、各国の政府高官らは、政府機関に内分泌攪乱の可能性を有する化学物質の検出技術を開発させ、ヒトや環境の曝露を抑制するための適切な対応策をとる方向に進んでいる。学者や政府が「体内小宇宙：インナースペース」の研究にこのような関心の高さを示しているのに、内分泌攪乱化学物質を検出するための、標準化され妥当性が検証された試験がないのはどういう理由だろうか。

本プレゼンテーションでは、内分泌攪乱化学物質への曝露を抑制するという政府の指示を満たすことが遅れている原因について論じる。21世紀に入るにあたって、内分泌攪乱の試験法に関する研究の現状について簡単な考察を行う。また、新しい分析法の開発と効率的な妥当性の検討および標準化を進めるための選択肢も提示する。科学者の皆さんが21世紀を「体内小宇宙：インナースペース」研究—すなわち、ヒトや野生生物の未来の世代の正常な機能や生存を維持するために、子宮や卵子を損傷することを防止するための研究—の時代にする方向に進むよう奨励することになれば幸いであると考えている。

インナースペース時代によろこそ。